正史實傳 以呂波文庫

壹

へ13
4307
1

伊呂波文庫序叙

金樓子曰。有人讀書把巻即睡曰此書巻為黄妳怡神不養性如乳媼也。されば書紙讀を添乳と云。志のまどろむと睡ましし、いふ書に二品あり。一ツは睡人に二ツは読あらう人歟。扨て是書中の文字を使ひて教ゆく。

2
250
1
早稲田大學教育學部
16089

神仙遊びて後悠々と睡らバ、又熱き乳
の功と為べし。予が著す草紙の如きハ、甚だ拙き
あるものから、稀なれバ讀人倦労さずして熟睡ず。
是を出もきねし乳字に依りて怒泣あぐる孫乃
類をせんこと、今まての著す所の子呂波文庫ハ。
さらに功拙の論ハ縁さ世ハあまりし忠

陰なる録を傳ふれバ、ぞうぶ厚くいろ
は何も貧之し児女の手すさみにも、其地の見に
俄然と睡り酔すへく思ふ所

干時天保甲午年如月義名再三辨くの日

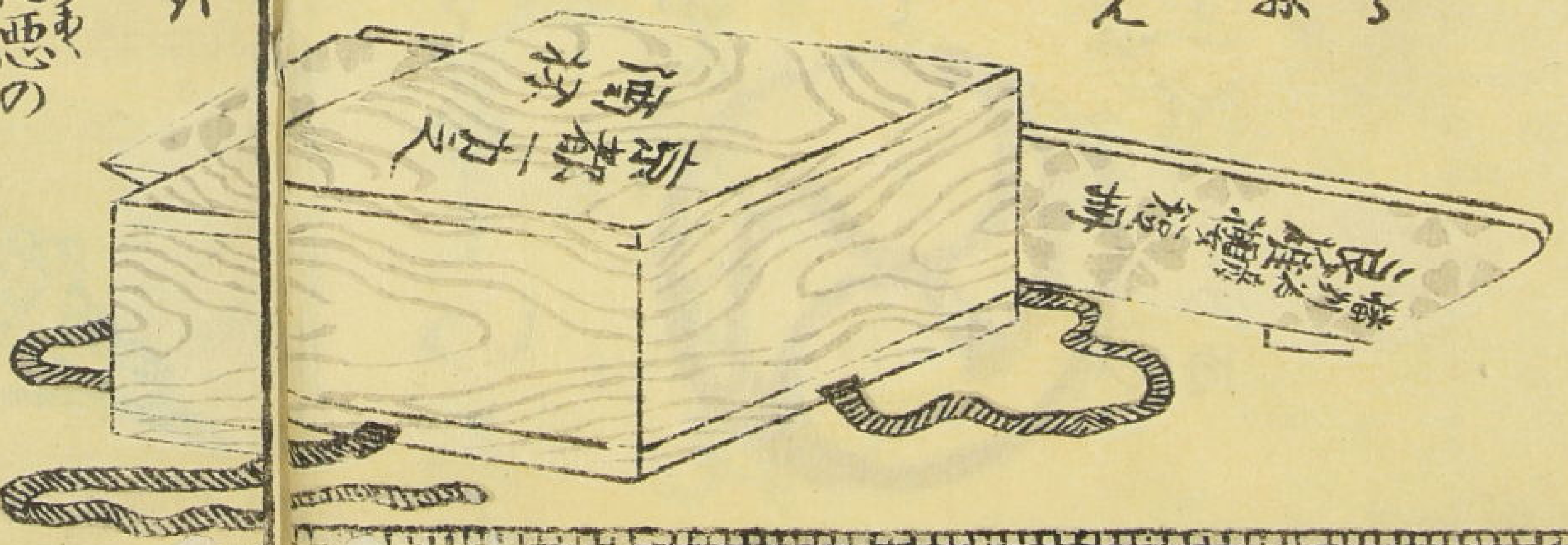
江戸　為永春水老人誌

引用書目

赤城盟傳
介石記
播磨杉原
本朝忠臣傳
赤穂鏡記
赤城武鑑
赤穂記
大石物語
赤城盟記
赤穂銘々傳
忠誠後鑑録
内侍所
遺老物語
靏之毛衣
異本義士傳
元正間記
江戸真砂子六十帖

伏稟

假名手本忠臣蔵の浄瑠理ハ天下に美稱せられ三才の童子も是を知る故小説をしる人もあるべし其流行ふもとづきて義士の傳を戯作せる音曲演戯画本草双紙ふいたるまで趣向をかえ其奇を登て彼が義勇の誠忠を演るの数百種和漢ふ比類なき義志を称するのゝ星霜押移れども世ふ廃せず然るを爰に戯墨の奇を愛して実傳を混ぜ傳ふも少なからず仍て巻端ふ義士の像を渓斎子ニ摸画させ四十有余人の畧傳を春水翁ニ正史によりて是を誌せり復監言の家ハ粉骨砕身の辛苦をいとふも婆婆ならし名を遂て終ふ本望を遂し光景を写せバその事実ふ從ふて貞婦列女のことを述せり又悪臆病とつましむるも勧善懲悪の一端なるべからやハ首官口画の本文ふ拘らざるをわやしとのふるの一編を嗣全部ふ充ほのこととき義士の畧傳全く備ふ本文ハ児女の見安きをうんが為ふ流俗の人情本に倣て善悪應報の理を誌せり狂訓亭主人一家の口調をのちてみな小傳ぎーむ世にわりふまてるゆゑるも浮説と一列ふ見ゑしあふてるかま義士の異説珍説耳なれざること多し古きを温ねて新らしく実傳を知るのがくなり数編發兌ふ佳境ふいたらん翼くハ宜しく高評をあへと者ら云



義士繡像四拾余人　朝倉伊八刀

版元
三林堂　欽白

鹽谷判官高貞

温矛謹素の生質ハ
ゆーて臣を愛し憐
むそと子のかくし臣も
まく君を思ふこと
児の親を慕ふが
ごとし千金の
弩ハ奚鼠の
為に機を不發と
いへども失國失命
臨節では臥竜の
猛虎に向ふがごとし
堪忍不及営中紛閙の罪
法令ハ反難し可惜文武
兼備の将

高野師直

欲ハ仁に勝義に勝禮に勝
智に勝所以貪欲
姦悪の
志威に
誇り
君を蔑にし
卑劣を行ふに
身を窓汚名を残して
家をほろぼし恥を異朝に
流布傳演し愚の甚しきハ
斯のごとし可謂奉録の賊士
人面獣心

大星由良之助良雄

忠ハ范蠡袁盎も不及勇ハ伍子胥雲長ニ比せり智ハ張良孔明ニ恥ぞ亡君の為ニ殉死ニ決する士三百余人盟約ニ背き残者五十人病ニ死し義ニ死する士三人四十余人良雄が指規ニ従忌日に當って敵師直の首を取冥位ニ備ふ志を遂輕内反間姣女ニ溺れ放蕩よまなく妻を離別し親族ニ義を絶ち後難を除く遠き慮りありし倭漢のまゝ聞も斯のごとき誠忠義勇の一豪傑ありしと世界代ニ美名を輝して忠臣の鑑と尊り

水ふる家藻くだけ浮くく咲かす いつむ花き梅が枝

元 大星良雄

嘗聞今世有忠臣
報國復讐寧顧身
效死唯知同取義
舎生正喜共成仁
豈須狗吠三千客
却勝薤歌五百人
伏劍一朝泉下去
英雄誰不涙沾巾

巻中繡像 溪斎英泉画

良金ハ父良雄に従ひ鎌倉に下り志を金鉄にひとしくして終に復讐乃素懐をとぐる時生年十六才智勇衆人にすぐれ美貌の聞え高し同盟教兼と小野九太夫親子が貪乱の悪をにくんで涙が不忠不義を正しくし天よりの美少年二人が手を以て

まるめあらん 欽

極楽の道すぢ一筋君とゆかんもあこがるゝそうそ

四十六人

大星良金

塩谷の忠臣等城小篭ても
殉死せんとも君恩に伏して
命を軽んずるハ君々たるが故に
臣も臣たり如斯臣たり
義士のことハ
本文に
委し
向島八十右エ門常樹
原郷右エ門元辰
原元辰
長谷孫九郎正辰
浦松半太夫高直

潮田政之丞守教
早野勘平義利は忠死同盟の約束をなせしを父母は農家にかはりて商ひの損益の外武備の義論談を発さず浪人せしにより伊丹に安住させんとて郷士某に聟養子の約諾をなし義利實をかくし父母を諫めて忠孝ならざる
ゆゑ金子をかりんことを欲し父義理に迫り郷士へわたさんとなに密事を告げるゆゑ義利せんかたなく大星へ書置して郷士をさし殺し自滅しくく殉死せり良雄山科にありてこれを閲覧歎して哀しとぞ
武士のみちと たのみのつな
一筋におもひ立けり
死出乃旅路に
早野勘平義利

正史實傳いろは文庫巻之一

東都　狂訓亭主人著編

小山田庄左エ門 共 直助 権兵衛 の傳

第一回

読賣高人のとゑ「敵討の次第を御覧じろく。古今稀なる敵討の次第書」も此度塩冶家の浪人四十七騎高の吏夜討致して。主君の敵を打取る次第を御覧じろ。上下までも偉明細　へと声高に呼び売こむ評判の敵討の次第ト呼立る商人の聲を聞より忽地の軒端の家より立出て買人あまた競ひて我勝にくそ

求めける。忠臣義士も幸不幸。適人に劣らぬと思ひ詰たる
金銭の。自由蕩ける色欲のためにぞ苦ると有けるし。爰に小
山田庄左衛門の父重兵衛と呼ぶ者は。既に齢も傾きて。八十
一歳の老衰と成りけるのみか病気も家連判状の数のまじはれども。
今は高年の忠義の魂孫子庄左衛門のけなげなる。積る願ひめかる勇
列の。義心なる者ぞ會盟の中とむるべ勇ましく。其身の病気も
うちは其上。今費来し彼討の次第義士の姓名記しける帝
附置く。織のうく。義疫となく探遊し始終残涜下せと家子

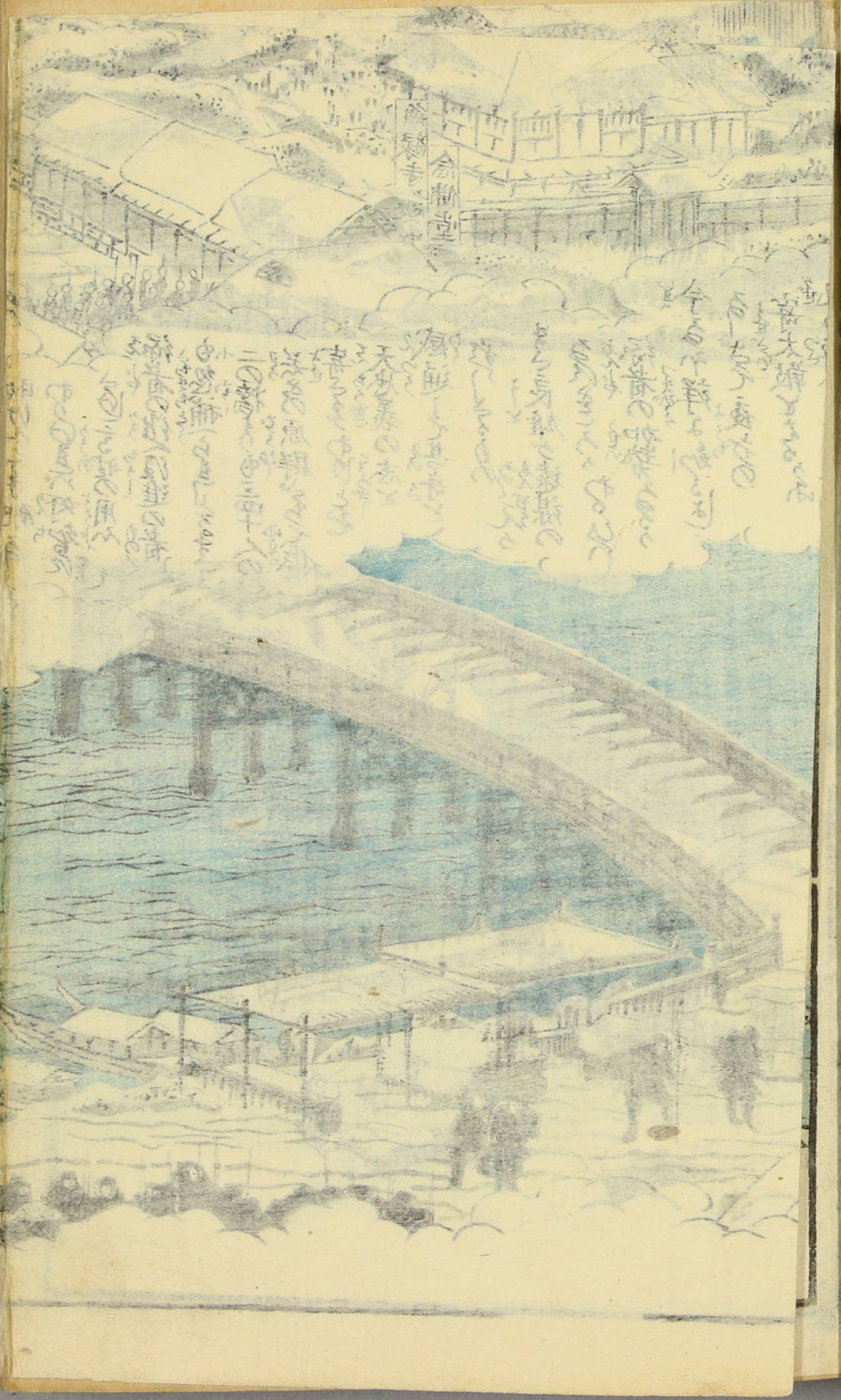
の名前あらざるは。さても不思議と独言「そこらちもない義理
あの紙燭にて寅尚初め大星氏も一方の。手紙を難し
庄左衛門。見る名を改めたる書漏せられる不首尾何で縛
此細。解の名目は書かれてもそれにもかゝはりぬ及言因
ぞん。弟とはなく門の戸押あけて。入来る隣の小間物屋「重
も齢は六十のうへなれども。隠居の合口とぞ年寄も世話ぞ
立寄って「モシ重兵衛さん。お前もう一の一件の宝板付て
貴方が来ましたか。イヤア此不自由なる身でも。其の一ぺん見事

あやひましょ　き「ヱ小菅屋さんお出なされます。今と是を呼出で
買ましょうが。紛らかしいせうよ見え過ます　小「ある程有難て
ござりませう。御紙のうても一昨日イヤ　第一昨日のとし紙。今日書きま
帝るのじやうらっきめで遠の　ミゑずがかりでござりませう。其是紙ば
まだ一とつきませぬが。将小三郎が出入する御屋敷から写して参りる
あの宏開よりも二軒のおけ人衆で。お書役小なるさの紙ちらして
持らく来ましたト　いう紙笑より重主溝八郎子の名おめるぎを
眼よかける連名出う統之眼よ　手紙さし出し　重「イヤ　要是て

かくしけるハ。ドレ引合してみませうト三枚ならべて人数をかぞえ
見れば全く紀せし御紀渋箕を積ど小山田とも。庄左衛門と紀し
てありけるが。老眼の眉ひそめ眼鏡の墨の紙をくらべ
候のあたりまで紙を寄む。文字もおぼろとかすかにけり。小主溝も
膝紙をより寄せて　小「モシ重主溝さん。尊父の筆性を見ますせ
結び。御子息さんの本名も。まだ存じませねが。一昨日さし
めた欲対の埋ると其のかぎ箱ハ見えぬ。御子息さんも固主の名家と
おめしなさまで二大事の御金近所の名へも有ましまして新をかく

御主人のよろこび。さぞうれしと貴もいらせん。御老年の御心細さと。お
家ゝ中にて種々お噂いたしました。御連名の御まへ御子息さまの
お名をどざりまする。総ての事に御実名が　主へさればサ私も
コレ是がと。おもへ〳〵中まづ楽にお名。数多とあつく探かへしまく。又
主どもえんね家子の姓名　小へおしく　あまりしれぬござりませぬお咎と
紀してござりましや。若旦那の御お名へ　主へサア実名へ小山田庄たら
小へエイア、小山田庄たらどのへ　主へハテ作山る御めへおろ押の名をが
何といひますと是まへ漏てあるけれど。若討紀の御法でもござりま

せぬか　小へイヤ左様でハござりませねが　主へイヤ〳〵ぞんぢ〳〵致める
御様子りや拝のその噂が承るさまするもござらぬ。若旦那
とのりまコレ此親父人　小へイエ何も委細とこと〳〵実ハ存ませねがト
りよ新兵ゑ事ら娘をみつくわけく能気実商人に従家へ来ま多病
親子の家よ。伜ハ是より仲間五助　五へ旦那さま今日の御病
気ハどうでござりまする　主へマア五助々家いのふよく様が知らる
まつし家さまで若旦那様は浮世も御存知きへイヤそれハそうとび
家の一件世間の噂が御やっぱりト又五助ハせうねが　たくね



義士夜討舊地之畧圖
師直屋敷
無縁寺
念佛堂

魯鈍の正直もの。若殿さまにもわるいともなく五へ「子で殿さまの御供を
打つやうなこともなく。四十七人徒党ひして。高の師直の屋しき夜
討かけ本望の時るのでござりませぬ。丁度私が今宵
其手ゑで手紙使がたのまれまして。帰りがけにむかふから敵の首
と取囲んで。引わけてござる所まして目なぞ及ばぬ程
じや義士じや英雄じやと往来もとまるくらひ。いやもう大そう
な評判でござりまする「ヤレ〱それはそうか方ハ行向つく家
中の衆と一つくみさいは幸ひあるまじや。わたくしも御の性質もあるか

今小兵衛が胸の拍子。其の様子なりで御菩提所へ引あげる
風情であつた。手前でも其よふ。さぞであつた。定めてそち方も
喜うて居られたであらう 五へ「さればのことでござりませぬ。御本望の
由。私も旦那病のゆへござりますが。それと申すも若旦那も大
切に一味と相聞きまして。このくあれは間近く若殿様が
ござらうと。先手の衆や御仲間のお方。とくと一くみそれも若旦那がござら
ぬゆへ。ぞうしきまでも不思議なことゆゑ其の中の
すぎさん云はる。ぬかりなくさて只一人。大小の文字さまが離れ枕よ

さて御出なされましたとの事。小山田さまハと尋ましたら。いつもかくん
町さしの国者。きつい怒らうして。ア重右衛門どの御家来五助か国
者の御病気へおしも殊々。八十歳にて死なされたと。さぞ難儀し
てござらう。あゝし出家のお人さがやうら。今度討てる加りねを残
念ながら思ひ出されて御見さる。それ進みけて御
たらさまハと笑ましけるべ。十二月の日に連中へ割符成る三百両
円覚寺へ納る亡君の御追善。その二品を請取て。御墓の前
経然奉る。さ命ハおしのめの。重右衛門が[illegible]さぞ[illegible]

ま思ひ出されが是非とも[illegible]大名が徒り御笑ける
御面目をうしなひまする身よろしく老人の気をおぐさ[illegible]
知遣れと。お頼ましてて大星さまの御返りけく御知らせ[illegible]
ござい。お由良殿へ此御遠慮ハございませぬかと笑て頼みく重右衛
清焼久。御酒赤くまた青く。書院かざし孝行なぎり[illegible]
御らく[illegible]も[illegible]小判も何とめさるの。あら[illegible]が
[illegible]の気の毒さ。是もののさへ[illegible]
[illegible]の時うハかくる貌をいふもの。まさ置此御所ござりまする

と諂ひける其様子なれば。それとなく爰を立のき。弟子重兵衛
自身も。とかく思ひめぐらしけるに。弟子の変心お遠ざかりましき由
あかれけるか。こと男子で。書置らまし。連名ハ一字も加ず名四十
七儀。小山田とも夜たゝとも。あらかじめ敵に我の乱までより密
奉せしまうらぶひあしとも知らずして絶対の噂を耳より自勝
しく。これめあせし弟子の名氏。いかにひも道ゑ知りしき今を
も知まぬ其の身も。存命られぬ面目なし。我も書へ立寄けるに
しとも思ひ遊べる重兵衛が我の其ぞ善きなり。五助ハ立らぬ
男なぞ。いかでかいふく書状の例の小間物屋寄る門にて
まし人ての噂もなし。数付よりく たまらず中ニたちて来る
小山田のさふしのさそくさかにて。しかれぞ隣の壁の紙つたへる
時しも壁紙に。ぐざと貫く白刃の切先てまでると大勢立合ひけり
おどろく中にもあの家の小兵衛。重兵衛かへ手打く。つたまへこて
其も知らざるぞ。彼重兵衛ハ奈のうに。腹切りけて切まざりしや
え壁にのまつく。咽ぬ貫くそ。その切先が小兵衛の咽へ突ぬけたる
まくわりけるなり。小兵衛ハ其手のつたへまでも。さてさてハ我拭むらか

老人病の身は弱しといへども。経究を窮るにあらざれば。黄泉の由
来さんで死しなんや。壮年剛気の勇士なりとも。さるはかれねど最期
なり。かへすがへす遺書を書おき有て

其この御恩に御為に紀を鈍じ紫衣被ゆる
後しくびれしとも老悦は似すの孝名
妄を悲しく後人分間家に御碑と
此度今日こそ死り童顔にあきらめ候

亡君に對し追善のために答へて面
面目せんとくへ天晴し死ぬる主君に
老後に死ぬる薄命と称すべし遁く
五郎人家来に刃渡し山尼の行年
頓首百

十二月廿日

小山田重兵衛書

近属清勇様

かゝる一書あるをやーうべ。小説をもとにして近所の人々。その心根を不便に思ひまくら主たちが不忠不孝なるかぎりはつくして。みなく此ことを公儀へ訴へたてまつりく。そまぐくの[illegible]ばしに渡らせ。路金を帯びるとぞ

かゝる悪業の子と生れし。主たちが悪業なれ。いかなる[illegible]もあるぞ

そのことは。次の巻下を読みてしるべし

第二回

再説小山田主たちは。太星の下知に随ひ。御菩提所円覚寺にいたり。それより同意の諸士へ金子を配当し買物借財の沸込又妻子等の扶助にあてさせんと。三百両を渡しぬ。これを懐中して大[illegible]墓所といふ所を往かくて[illegible]ぐ。[illegible]寒の身に[illegible]ぐと冷とする。寒き綾ぎの酒機嫌。捨てて身へあそびの昨日へ身の骨を[illegible]の眼にも世の中の。悪の曲者なるよ。[illegible]の[illegible]より新

さて年の頃十七八の島田髷。姿もすぐれし処女の生立。底たどたどしき其の
浮世もよく着る物も美しげ頂。衣服も縮緬の上着に婦人わりそ妻に
せんと祝ふまで物すくなく。書物指しもその中には書物の大学あり
おまけに。なりその浮世は書籍類。絵ある縁の絵姿子に。[illegible]
[illegible]のりし來りたるに。其紙に見ゆる芝人様。振かへりたる娘の顔
見て女房と約束せし人に出会ぬ面ざしまそれと一際の美人
聞きけり。女も風と眼を見合せ。恥かしそうに顔をそむけ。小
褄とる手もしをらしく。[illegible]紙白紙。[illegible]巻

の紅縮緬[illegible]亀風の[illegible]や[illegible]や。[illegible]の
[illegible]図案[illegible]紋[illegible]下[illegible]
を三丁[illegible]町家の中[illegible]と[illegible]
[illegible]常[illegible]家あり。其間口二間の
表座敷一間の[illegible]戸口[illegible]二尺の箱膳
[illegible]の内[illegible]小座敷[illegible]の[illegible]もよく。[illegible]二階に
二方[illegible]作の細工あり。二階の[illegible]内の
遊び主人の[illegible]俗服[illegible]時

且ツ羨しき住居なり。娘はその格子戸を明て室へぞ入りぬ
ける。恋ひ慕ひし娘ならんと手に持しものを置くまゝにおとく。忙
然としてゐたりしも二階に糸竹の音きこえしは合奏なる妻
琴の調子よく。かの間に響のあく声にまじる女の物ごし婉く
として実母なれば。面孔は気ならず。胸に独する思案ごと「ア世
の中といふものは思ふまゝならぬもの。同じ世界に住る人で。節季ぎ
あの琴三味線。なのしる芸を好んでくらし。美人揃の女好男話
そ見ては引かへ此方は俸目紙をみて纔さは鼻音。大額疵禿くいよ

同じ事なれば新玉なる人は眼の切りと晴月も隠日も定まる命を
夢にたとへし一生は別てもあゝいふ夢でナア。ト侘しげに門
口格子戸を明けて内より出ける。三十才ばかりの女房の色
白くして器容あるが。浴衣は下女にかくさせ。出合がしらに
気なると息つきあはせて 女房「ヲヤ お乙さん。ト 喚かけて直ぐ気
をつけ 乙「イヤ 今日はお稽古にいきましたが。ト 言捨て下る
うへ 格子戸より奥の方へむかひ 女「モウ ちよいと ト
何ぞ 女「アノ 小山田の乙さんがお入なさいました ト いふ声聞へ

主出る。この家の主も塩冶の浪人。以前ハ萬屋といひし人の金
貸にて。此家の身代を幸ひに。紛らはしき自分の金子を
旨とする。料理屋の。女を抱へて料理屋の取廻し女に通ハして
其のあるじの手代を身を業としあり。まこと内々金を貸して利分を業とし
今ハ豊かに暮らして。実名を更に鉄太郎と。木村岡右衛門と改名し
て。此の所の八百屋と。浪人八百やで是もかくし
屋このぼコレサ 此方へ 旦那一玉要民一別ハ無事か此処へ
様で 女ハアレ 参りあまりしい旅人 草ハ若く 又此方へわんあげて

ハテサ あがせそんなに多く来るならバ旅人が皆
へ。サアく何でも草鞋胸当脚半粮袋までも是郷とハよ
旅のこの上に乗るから奥の方へ茶をやる其のたらいの
銅盥の湯を汲んで来る茶を入れて客に上げよ
せん。今日ハチト気の利いた旅の方へ廻られあらまほしく。業へ
ハテサ 此の金あるの代りの世に稼ぎのまゝ久しぶりで金の
看板。ちよ一口元気をつけて注させ入口門限を業とする身分
でもわたし一人また浪人おや旅人の馬来るしい。まく情をとうと

親子
志あるのて
列恵乃
亡名ふ
擬感ん

くたちよつて此方へ来るせへト番頭に足袋洗わせる。新へ看
新「娘の手拭をもち来り「アノこれでおふきなさいまし」ドレ
看がふいてあげませう 新へ「イエくどういたして勿体ない」新風情
でへあつかましく膝へつくもくどうぞかまひなくト完爾わらふ此
ところへ女房たちの胸ドキく 女房衆の紋きき女へ「そまでおやア女房さん
お拵びなさいヨ。ちよつと湯へ継ぐまはるか 新へ「へいく御めかり
さト さし込み入いる 巣へ「サアヨござりますぞ火を沢山に持て来る
そーく座りに紙をかけて鍋焼の手でもちつらくるサアく大将の
新へ膝へ。これはありがたいいく親父サアこくへさしく久しくある
んざ子。時よ岩重る形で何処へ出かけるつもりぞ 新へ「へイちよと逢
方へよんどころなくトいふ所へ酒肴 巣へ「これはくぞんトド
がけるい御挨拶を縁にこれまでハ 巣「アアこれは堅くるしく志
新へで。めぐらでもかまいませへト是より盃の数もかさなる二人
とも機嫌よくなりて 巣へ「キイく お安やくト よべかの 巣へ
キイ手めへ女房さんに酌をしてあげる 安へ「ハイ 今お暇勤めもつく
まゐりましてくるト揚手へ行 巣へ「どうぞあの女は女房にのして

きかさるはねへか。まんざら山出しでも有へぜ　庄「ヱヘヽヽ浪人
といやア。手柄な気転はござりません　栄「浪人ぢやとて乗めるのぢやア
其上大小さへ挿すりやア座敷にお法が出来ませ　庄「其方は恥とも
不届な役人の様だ。おまへの身の上へは実に悪しいこだ。不躾な
ぐら何が四海善道で此様に願ふておくらしあさるか。人も働きの
あると役人でハ大それた遠ひぢやねへ。どうすれバ野方流もいって
歎しからして居りまする　栄「コウ／＼そればかりせまい世間といふ
ものゞ塩谷の家中で居るときハ首や尾が侍へ入るけれど浪
人になりやア天井抜何の遠慮もいらぬ役人だ。おもしろいと
おもふて看るけれど恩愛が子を離るゝトまゝの中に女房おや
義も浅より深うなく得られ。さて／＼耕へ酒のうちに時刻
うつさずなら。さすがに血判同列の誓をめぐりあひしと
思へば形容を正しうして　庄「イヤ存命の御紀元手首の往金
歩行勝手がらおさまうたして　栄「それゆく庄さう。たとへ何の身が
あるにもしろ。今から何処へ往まするあかゝトいかついて立花
の陽子あ路　栄「そりやさけしれを御発しなら。只一酒の様世話

この書附を懐へ入て腰に落つけてもよし。らくじやア
ねへか 天「イヤアいつの間にか大事な書付を。今夜の
平間村まで 栄「コウ、その用向は大略承知だが。皆様はどう
真の間ぞせ 天「エ 何が エ 栄「コレ斯くいふ我も此の用と
いふは一味のもの 天「エ 栄「ぶつぎ話くりまする。敵役そりやア
主従の中おやア忠義といふものゝ。君の血と家来の心
とちがつくわそれ何ゆゑあらう。是よく考へてみな亡君の
高の民を切く捨てとまはこそ。それ天下の為に捨るの忠義
他よ難義をうけさせて権威をふるふ所は真似らしい。いふと
せらるゝ種あらう。家をも身をも御捨なされて、忠臣なども
織義の善悪お損トでも同じ。高のもちそこの不首尾の
咎ることもぞ亡君の此御内とす。其法にそむく浪人の勝
ふたりあんぞと繕党に償し。一味をかたらひお由緒が上への
恐ら亡君へかへつて不忠なり。画くが時節をまつく
何年浪人の渡世業にも。利分をかんがへ今様をたくはへそこまで
執権の家へ手づるひしで亡君の御舎弟さまを再度お召

ざしよ家督よ。弟みが忠臣の横死とやあるまじ。御治世ハ
もかはりなんぞ。おさながしさるが亡君の御本意ふあらじく
のこの御当家ハ一門へまでおよぶが有川ふて御先祖へも不
忠とあるぞ。貴身一公へおてざりまく。一味徒党の御子孫
つまりで。かる道理ぞ。御無しかまでと解りけるまた元来の
乳まで小口。佞奸好智の御手積手を揆らしく突るして
前置かさるる時しも。ちや入相の鐘の音の。陰々ととそ
響わたりける。かゝる所へかのお妾ハ一際美しく化粧せるし底

たるが側の座へ。組付つけくあるまさバ終ふ鉄石の心も
ぐずけ酒ま歓楽をせらしるのひそめくらふ居れりける。烏呼
かまいはるや世の人情。暫時の色まは魂を奪はれまで穢る
名をば百年の後ま流して。そしらはく。元との弟めの行よりぞ。
ゑば姿が色香ま迷ひ。さまべ壮年の中ハ血気いまだ定
まらざれバ。是をいましむるま好色まあると。数人の金言身ふ為

正史實傳いろは文庫巻之一終

婦人孝經 江戸花誌　東里山人作　前後八冊

氷縁奇遇都の花　萱垣琴彦作　初編三冊

野縁乃藤波　十返舎一九作　前後六冊

廿三夜日待物語　岡三鳥作　前後六冊

正史實傳 いろは文庫巻之二

江戸　狂訓亭主人著編

第三回

「一人を殺て後世を願ハかうひ衆生の爲にも成ると誨て別て行く

まこと理ぞかし 諸行無常の觀念も夜々よりぬれてたゞ物淋しく

稚き時よりもとでが菩提の眞中かゝり」ト心の澄みよ三際

陰の事をも弁へ居る事の夜や繊毫の心のあとかげし 小

前後をまよはし酒のとがなれバ 手に二階の止宿

て座敷の内へ思案にくれてゐる主女へ此家の女房お茶をもて
銭衆ある紙入より纔しく元年号の紀元ならぬ多ひ機げん
冬「主さんキツウお寝坊 女「ハイ イエ まだ宵からいつそお手水の
今晩はいつくと思ひながらおなりましたへ 冬「アレサ 主さんキツウ
手酌に盃を傾けしがはいつよしてお気楽にもおなりなさるは
といひながら小菊の粉を懐に出し 冬「お茶を 女へ
へイ ト いつて立て台所へ行。あとにお冬の房をつぶさにみるに
酒の相手にありて起された眼のふち櫻色にはほんのりと
寐すがたをおしかくすまにて結び目のある白縮緬のゆかりし
あらはにして元結と細き錦の帯揚に琴柱の紋の
をちまいと相引と衣々風情ある姿はいとどおもしろく
縞の黒縮緬に打紐。例のお安は上喜撰か茶の湯のおし
らく。耳の落梅へ手をさしかけて。茶棚の菓子鉢を持
きたり 安「主さんお茶をおあがんなさいましト いひつゝ寄りて
お冬をなぐさめ 安「お冬さんキツウお寝坊でございますね 冬「イヤ 主様
く いつまでもいつもおちる寝ておくれのお帰さん主人へ気の毒ぞ

そこへ寝て庄さんを介抱してあげてくださるか。大そう
酔て御出なさる。一人寝かしてハおかれまいし。まさか今夜ハ夜
具もたんとないから。庄さんの枕へ寝かしておあげなさいトいふが
お安も兼て思ふ男よ。清まぐる前世の宿業なりけん。否ともいわ
られぬ稲荷の。権をるお客があるからよ。嬉しそうなる笑ひ
顔よ。結ぶの神もうれしく。庄さんの寝ねふり。えんね権
まで見ても胸ドキドキ。燭台の二ツ一ツ夜着。寝ようとの錦よお冬ハ
座敷へいつ。冬「アヽもう寝ようヨ。ドレ下へ往て寝べい寝るとト

完念ほうひ。膝子を下って行。跡にはさし向ひて互に顔面
お安ハ床の側へより 安「庄さん モシ もうおやすみなさいトりんで
あげましやうト夜着の裾から手を入れさすりてかくれば
庄さんその手をとらへかり引寄せ 庄「コウお安さんおまへさんは
孤おやすみだがおん情嬉しくって気味のよいのど
安「あれさござりますまへん 庄「なぜと言っておまへんの揺るか
娘子を側へ来して来るとふも不測ご 安「いや冥加で
ございませうが。わたくしの為くそくおってもございますまい。おまへ

お連入なさつさ時分からこしいちらまぞんじて新で見ね申
おかみさんも粋なおかたゞよう旦那さんはお馴ひやして。お世辞
よおいゝて。左様するとお座敷へ出てく。お客の機嫌をとる
気ぐらみもなくつてよからう。どふで商売らしいから。酒はのま
しいで素人衆よ主来てらぐくもめつたにからとうどくの
後にいつでも見へ程のことお気らひや気はありますまい。ぶり
ぞおもしろ塵でも。せめて今宵一夜は妙艶の女一こうぞおい
まずおまへさん御酒でおせわさまへまでもきたいごお宿の

昨夜はあいうまいまち川であげませう。御縁組あなさんはまし ヨ
お部屋でとさいませう　兵十郎勤め後の後のとりの
評判でお人が。全体おまへさんの身分だ「わたしはまれ
みせでしいはまかでとおかし召ませうが。あちらのお宅へおま人
さんのお若達公の由お気のおまる様なことはございませんのさ
せんかヨ。兼ねてのお宅へ関女の国見えて来て居ますそのぞ
ございますも爺さんが不仕合で。おかみさんは嫌つてまづ
居ますまいよ。公のまつけて不自由がち。いつでもお役よ心も

霙艶
雪を欺く
摸稜に死

出かけますると徳もありませぬ。親達の為にもと
ぞんじて。わたくし来て居りますのでございますヨ　客へ左様なら
それがかんじんなこと。それではその宅に今でも誰ぞ見ますのか
妾「ハイ十二歳ぐらゐまでは。親にかゝりましてくらしましたが
なにぶん家の中にさへ此くと。寒気は肌をさすごとく。妾は思
はずも身体をふるはし　妾「それ寒くなるときに手をあぶり
火鉢をひきよせる　客「なんにも身に着る程さむくなるに
冬のあつさではありましたが。いくら酒の湯あがりで温まるが。お前さんは左ぞ
寒からう我が家の内へ行て来う。いやでも寒さ凌ぐ
ために遠ふて寝かしておくれ　妾「ハイなにぶんそのまゝでもどうも
寒気の毒でございます　客「それこそ寒気の毒ぞう風で
も知らせるとお気さんの並べる紙漉き職人せめて　と手紙
出すとも。お妾は酒にて気中も怯ぞ。まず肌あはせ男の側
寄りつきそのまゝにじり寄と。恍惚として色らしく寵
たのしむ心もうます。終に金銭の取りひきをしてこそ情欲を
とぞまげたりとぞ。さて翌日は酒の酔さめての後は人も會

盟同列の義士のなかにも病に臥居る父の為。さればこそ
当人もなげかしく。既に志を改めんとせるに。妻は親に
側に孝なれば。鉄太郎の夫婦もともに。酒と色とに身を
しづめ。銀二百両の金ありと。身を売るとぞかくさんぞと
不義の醉すぎいかゞりける。同じく色事を親にあらはさんと
義士猶よく情も薄く。実と操の松の緑の義れと共に
それは抑など浪士の岡野氏その業終に十六業のごとく
塩冶の家臣浪人となし。いまだ城下にありける中。父の金なれ
ば病死しぬ。遂に剃髪し三十年。大星のもとをもとめて孤
独をめぐむ慈仁と然ば。いよく按る大と家ざゝ後金
光を好く。花より花を下つまえ歓高野の属家の業内
かくしく知るべき主君に属家の為に住居をまうけ。太
物荒物乾物など。諸る紙大略調へて。世に調法なる
まかり。寄んとちやぜん人三番屋と。中川と婆の商人。本名
指[illegible]金馬三年[illegible]。閏[illegible]三十[illegible]。失[illegible]
[illegible]七[illegible]一[illegible]多紙改形[illegible]改[illegible]武家

ところへ宝暦のころまひ。かくて園野八年つとめ。旧十余人の
中にても第一番の美男也。かの店にゐる売女あまた貫
物に来る人にも。是を愛して人そなへ。元来高楼の家
中にて生れ。仕入座敷の元よりかまへぞ。気入る公の大夫衆
中間小者へ目をかけて。使に来る度毎に。酒代をあたへ酒
代を与へ。その外に給をくれせしかど。いまだ重役の人にハ
深くもなじまねど。その外の大器なるも悉くなれ親しみ奉
何とぞ此座の用達になりたしと。積く手入をなしけれども
用心厳しき家中の出入むづかしくして用達商人と
成とも容易く入まじ。殊に尾株貞八の出入切手状目くら
わかるなり。かく問ひかけれバ義太夫ふとんど当惑なし
実に大旦那が推量のごとく。款の用向おぼつかなしと見えしや
まいりくれやうものなると互に契約しけるが。彼二十余人
の其の間に。語らひ寄けん高野の家老堀井理右衛門の
小児の守女おまつといひて十六歳の處女をしたしくちから
へ。ものそのうへ積紙ぞたのびる。此まつ守女も年ゆゑね

徒の女は似もやらで。丹誠をつくりなしたるしく。浮気の恋の
ところにあらで。三十郎の男ぶり。情らしさといふ人だね。夫じ
あへたりとも別れなく。まめやかに夫婦となりなりし今を
いたる辛苦もいとせど。夫と人一年二年は合点ゆゑくらし
てゐまとて。こゝにかりくねるをとぞ楽しみなれて楽しうと
見聞も然もうけし。紀様は聞所もよろこびて気長く
懇切を尽くしゐるめへ。今は陰くもしかあ人まろとかいひ安
きるよ。金も人目の寛濶ぞて。今日をのび来る厳くそろくは

神子山町の叔父人の家からて叔父ゆもおまへ様に逢はうと
聞しても逢しるなまど。そばちやもわって門口から〔叔父〕
さんまてこさえハ来ませんから 叟へ おまへのサア あが
まやナ。何にも色男のおとごとえて。家内へ這入も端めく
わるう笑くもあんまりでハ アハゝゝト気難ものの。おまへハ見
に頼ってゐる 叔父へ アレサ 伯父さんそうでハありいね。今日ハ
たやく来ていろく相談するがあるから。其の値もりぐ
届く所をツイ おそくなりましたさんがおり来てまで あくさ

らうと云つてサ　大へ「そうか。どうりで先刻来る長八さく
ゐなさらく、ゑゑなしで居るうちに手代人が来ねへのだらう
前同様にしそうな渡世に来ませう。おかくしおまへが来るぞ
あろぽまくりて並くなまあといつて。今おまへ御礼もおさらて
お飯のおかずもおしらへくあるぞ。悪人、諸々も
多くく来るさるの紙綴く居や。おらア今出入場うく
咋ほ来さ由へおまへを継て来るかどうか。嘘をして々まと
そおくま。おまへが紙並く出て行

第四回

神子山町なるおまへが伯父ハ、大工平吉とて名高き者にて近年
株式をゆづりて、今ハ隠居の身となり、住ゐを任せ業の他
の動なる事、元番匠絵図方にて間取割方上手の棟梁なりしが
入場より帰り来り、何か入用ありとて人多くの絵図紙
ならべて。彼是つかへを手前へ二階よりして下へ来る三十
郎ハ平吉が前へ向ひ　三「ヤレヤレツイろくと寝へまして。おまへ
宮平いらの方ようす　平「十二今しがた帰りがけの旦ろっ。主人ハよっく

寝そうじやないか。跡で聞して見ろとやて。そんならそつと出て行
ましよ。どうかぞあの形る分別るし。始終思案がつかねへせう
が、あなたさけ気に様よ面倒をつれて世話くだされまし。私が
為なんは一人の娘。田舎の実く親は二人とも。モウ三年前に古
人となりて。今では私の姪も同じよふに力にするわたしがこと
おまへも此まへは田舎人でござりやす。来年はわたしが女房にして。こんど世
でも出そふしとの兼ての御相談。三春屋が御縁者なら
ゆるしてやお世話もなさらふ。一が万事猶は正しふ助まし。ぜ　三へ

へイ。それぞ万事はお頼ひ申ます　平へ「コレ御らうじろ。此筆に
名人時分の清合と兼房の絵図が此様にありやモ
三へ「へゑあの猪之助が御屋敷の絵が其合ござりますよ
平へ「高名武蔵坊の事は町の遠州しよくくと書文が
御ざりませんの。あのきん七下りの由緒ある一枚の絵図紙
でえらい腕　三へ「コリヤ是高野師匠の　平へ「今の屋
敷が出来ると名仲間の評を聞て今絵サ　三へ「左様さ
べ此今の通りの遠方で　平へ「重関紙とじめ奥を長御蔵

へ勿論恩長座遣ござつても大暑はそまてたが不審の
修業は元来松が相済ますサ　二〽さすがは天よりさづかる才の
平〽エ何がエ　二〽アハヽヽそれは芝居のせりふの名和サトのは
絵さへ此組より名にまで手よりせ縦おぼえつまわらべに吐きて胸の
内に記憶なしくる高野の屋敷なかるる此国を刻印の
趣向と思案をなして平生清を向ひ　二〽もし伯父さん此絵本
と二三枚翻すにはなりませんか　平〽何に書さる法の本が　二〽エ名ふ
子どもの時からな絵ずる画本ぞのといふものが好でござりました

から菱川の画も随分と読くなりて居ますん　平〽何書籍
さて是あるなる随分よきまでなりならば何れでもお持なされさへあれば
まの絵本は残してあるなん好せ人是は後人悲しいくは
海絵人絵具面実は焼すそさ法のもんで彼ふつみせくれは
あらくおいのサ　二〽へイ是なる子。これやアたしか私どもの向
屋敷の高楚さまの　平〽さればお何もかまひはあるまい
けれど。塩冶家の浪人元が。此主の銘を付翻らう趣
続までも来ゆうとか用心で。盗し元の案内を世間へ

しらせまいと。厳しく口留がしてありますゆゑ　三「コリヤ　イヤ　申し

かし。其様なこともござりますまい。あの当座ならおいらは末

其様な気の人もあるまいが。家業彼是二十

年たちまで。今まで手がけました人の事のせつでも命を捨て

古参人名儀とりの彫は。出来ませぬすと。おりあげません。ま

しく商人じやなどが。まかり今でも命惜しくと覚えますは

直に彫かけして気づかひはござりません。そりやおかしくは名

人の所作。切利ぶり。何処の絵具ぶり知らせはいたしません

まひ　平「さうさ頼む。高楼師とやらいふ案内者切ましたりやア

これは絵人。外の絵具より念を入まして。素人不向きのこの

やうなく。庭の泉水の綺麗の流されせ。おかしこさ

れが自然と和合不思議のも残念な壁の掛絵のし

ても。目のあぐさるみなりそうじや。切がる。おまへまでえん

ぜますならう。さすれば高楼とりの所を切まして

三「ハテ　お遣はなく切りますと。手「其方の小刀の

縁や。たのこの志まする。おまへおくる箱引出し三「エイ

キ「ハテサ そうじやくしにきらるゝならハ。塩冶の忠義なる浪人
衆へでも。売てやる今にもあるまいそうな 三「ハテ 商ひ御心さもなき
の 手「アハヽ 商人を罪にする。侍人気がわるくなりて百
でも残にあるところか。ヲイ 薄銭にもそこのしや。何も気にかゝる
ことではないハ。他の見ねたよに持てござれ 三「豆とアノト
おもひこく。其外とおひと手に渡へうち 手一「やれく ハヤ
おもろいのに行きござるぞ。もうし おまへの墓かも ならぬ
三「御茶 おまへが墓にも参るぞと 手「ハテ 今日ハ帰久

ちゝはあけいまし 三八「左様ならバ まとさ近日ト いふ身おひ
しで立路る心の中に三十余里が。虚ハ秘び東へいそぐひ
そまりいよく おもてに親しく交はりしが。実に渡
せし 鈴木町。高塩の夢積りにお遠なりしと かうして
しらバ。急ぎ その場を出立する 大星の許へつたへし
けれバ。由良之助大きによろこび。それより 東へ下る所存
なり。夜討のしなの手配りなし。此図を密く あはせしとぞ
されば 大星の用心深く。此外義士の忠義よりて 手便

明約ハ
交ハ不斗
色慾の
墜穴は

をもとめておくりける。絵図に合して参考すべし。たしかに
間違なかりける証拠見定めて後用ひしなり。初て太守は
忠臣と下され。後方の手続合を下知しけるが。郡と九岡野
三十郎に向ひ 大「イヤ 十三 岡野氏其許は妻女の安堵方
便はいかがいたし置ましたる 三「ヘイ イエ 拙者は此程の主意
いまだ妻とてもの〻は持ませねが何分 大「夫れは
またり其許其のえび師匠の案内なりしく聞えしは
継手続くと手にいたしくれしぞ夫人同居はいたさまじん

終ハ夫婦と約束致。誓ひし處ハ君の為。除死罪
となりいられて後ど女ながらおもひ諸わるべき所業を人が
切腹なさろ討死なと二ツに一ツ命の定め。それとも知らず
でこさりますいらつへさぞかし周章なさらん人の跡を今
慕ってぞなさるべきするぞへあけれども。せめて女子の身の
落ち着き下二十両の金を渡しければ。岡野も大に歓びて
これを恩義に思ひしく。来まさ在所より出るまでも
入用のことかへんすへ。不残後の拾て中へなしりてと

噂えけるが。夜討の一儀にまじりてなく。高野の屋しきの
いくさに紛らはせ。伯父平右衛門が頭へ打かけたるが間も
なく夜討の評判高く。高野の門前なる三春屋なる
平右衛門といふも。塩冶浪人の義士にして。千代も残らぬ
一味の忠臣。かゝるまでありけるに。同輩の手にかゝりき
噂ばかりて折ど絶く和尚が為。伯父平右衛門ハるてとゞめり
さうして居りしもそのまゝぞとハ。わがさて猶の世のうち。不
便いやましきせ紙。寄せじとまでも哭く和尚が。猶

くるしくも然しさうハ。世間の人の噂のみならず。ききたる男と
海辺中。能な猶ほわたがまゝても。愈ほあらハれぬの
あらで。十ヶ九ッ切腹か首尾よくとも海溝ほとりに
根の高き身と。なりも出ずべ最上の仕合せなりと
きく住くさ。海かくしくまそあがる。長屋の噂過ても
ば義士達のなり行を。いまもくと案じける。昔の世界
といひながら。つなげる十年を三ツ七ツ。おそくわが是に殺され
小も。済みがる塩冶の夜討が。身のかくしさうするぞとハ

しらで智恵まし昨日今日。稽古しるぞまさりける
御亭主の心遣ハおきのどくなれど キ「コウ おきのどくや。手前ア
毎月くそんな無心ばかりして居るが。なんぼでも悪く
おもふといふ御人だぜ。モコウ 古川と気随清く めちく人
そりやア紙縫くよくよもむずが。世の中のちとく
いふものハ。何もかも約束ごとだと御申ます。すぐく三
十年さんが実家の酒い人ありでこそ其元ハ苦労の
駄賃めしとやかまうね。常座の花と知らず無しと心遣
つまでもおくも給金ハあい著を。大まひの金をつかぶく
ちがけられ。娘様おねしが安堵の手当ごまかしとものふ
しそ おさまアあれア。腰にも浮き出来 結人つけぶぜ 吉「へ
サア こまほ其様に跡くまで。おだしめしその御法切ととりま
世間の人さんが。知るもしらぬも素そやしも。おかさが偽だ
けふらくまつり。第一あいまねまするつるる。悪て居まする
つましが苦労ー 浮紙なぐく。鼻紙で包紙
ふゐるがら 吉「へ 御余えぞつぞ御時ハ。光 不在の

罪をつぐなふ。縁者しるしむすびけり。涙のたねとなしたまひけり

正史實傳いろは文庫巻之三

江戸　狂訓亭主人著編

第五回

そも大星の君子の智よく衆人を精育なしたる人その氣風によりて是を教訓中にも大鷲文吾と云しハ忠直いん方なけれど生まれついての麁忽ものの心氣せはしき生まれなりしが實の敷ぞ助ハ文五口をきゝめて氣をおこさせむことをするべしとありければ文吾も天性魯

小筆しれ人ありけるが其紙史いかなる業を学びるべ
き天運にもとめてことわりなど鴬の態しく俳諧を
学びよとぞをしえけるされば文台その日より師を
ありとめて考へんとなしけれどもさらに初心のたぐひ
なく他人は同じおのが宅に悦ぐ業ト居くりしがお
其の庭に鴬の初音めづらしくきこえつりけるよこぞ風
流とせらんの発明あるべしと首紙傾けありくその旅
をぞ浮く抜けり

鴬の初音聞く耳は別にしてかく武士なる

かくありてやひそかに大笑ひにまかせければ中の丞は是れ
をうんく大によろこび文字の教え採ることどもを始め名は
乾せしのがるの風流を業とし其作ぞ雅名をあらたで
あらん惜いかな手示業のつきいでぬのこ今すこし
短冊ひゆへとおもりしありて大鐘文台はうまうしげによろ
こび給ふ紙簡待ちてすぎけるをしらぬものもおくいと
おかしかりける人ありとて笑ひのこゑとありけるがまさ二十日

積もく後

初まくさく耳に列する武士の家

まくさ十四日過しく後

武士の営きいく並ふけり

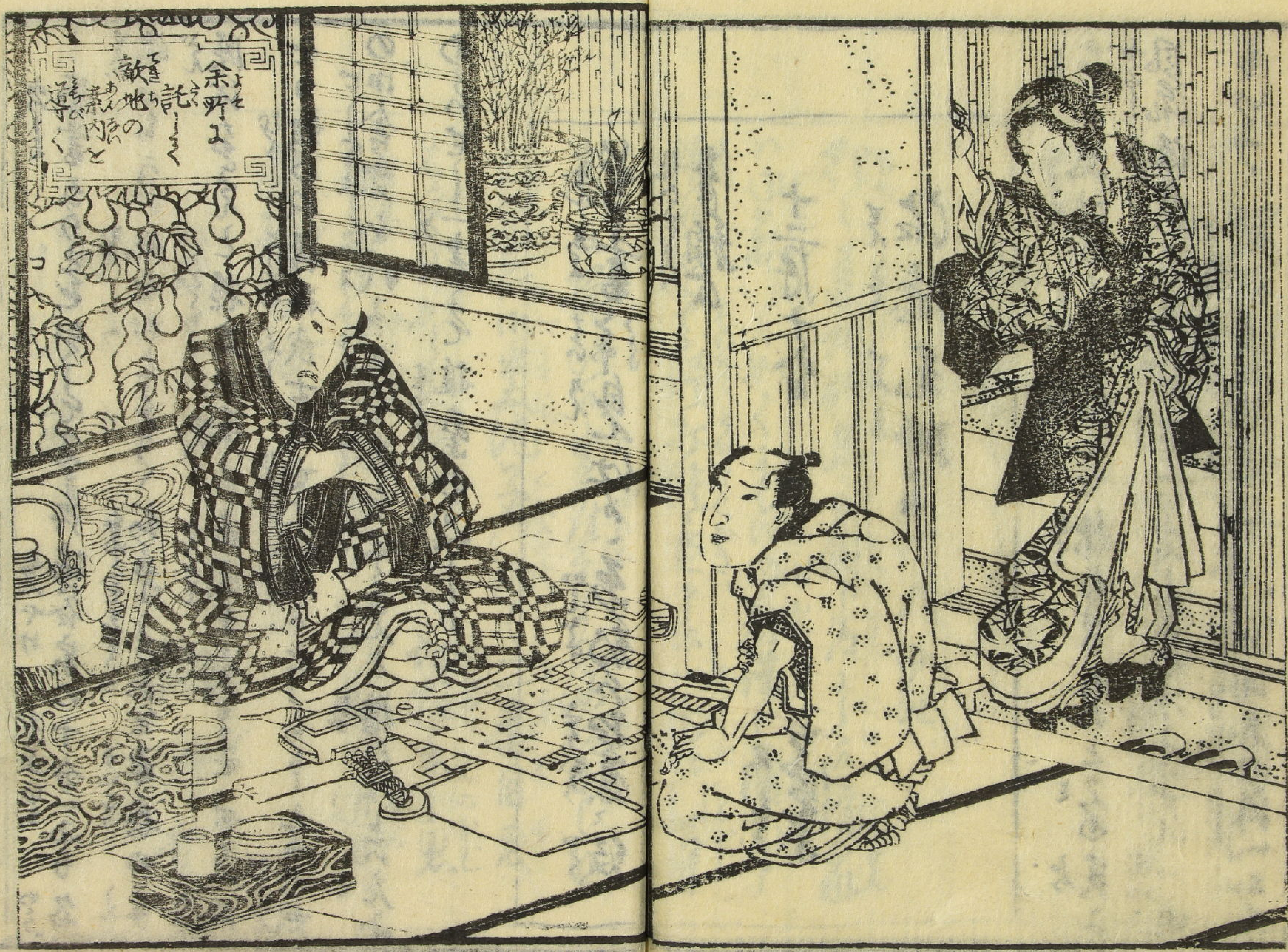
こゝに及びいよりて自然と其の奔逸を絶くりしかバ大星ハ手紙おくよろこび嗚呼痛むべしとの名吟実に文武の義道をかねたる者とハ其の人あらんと賞されけるがまさしく後にハ俳諧者流の達人となり須の宝か井晋子あんどく麗然あらく湖月堂子葉と雅名し塩冶家断絶の後ハ専ら風流を玩バ一代の雅吟もあくるかぎりとふその一二然あげて雑なる文芝を田女に示をさ水間沾徳と以て俳諧の宗匠人晩対の思に遂まし事歎あり

上主に儀する鍬亀也安とる霄なる人に元は大高氏の祖
四際も備ゆる家の絵と年来四郎とて其の家
少殺一通りお傳くすれ義士拙老なり 西鶴

の御難義ゟ今晩者亭主ハ振舞ハ宵ハ
御懇情被思召て末く世に及ひ申
候間ハ
山紙置ちつくも拝く
まつ乃つれ
数く書机竹筆も同し居ろくハ結構
ハ御殿ゟし如くまそハ御礼備し蒲団
請候て御座手程述中ハ一向如斯候

春頃ハ
十二月十日
沼纏先師に
君まへ

右之挽村の器具上候んで饗応のとらへ宴之
風流満座大丈夫の士といふべしさて次ハいさん一遍
をいよく護挽と紙紙寛むるより銭闘巻の纏へおく


余所よ詭〻く
敵地の案内と
導く

し密書ありとぞかくしてつゐには塩谷家の十分一ゆゑ名
諸士それぞれは悦をおこしともに行年再興の手
随従あるんと旧君の面々は名聞をたのまずして無念
をも顧みぬ従義武士と世上の人々もてはやしたる亡君
の旧悪を代よりよく忠を尽さんと願ひしと云たまふ
あらはせし一書なれば推察あるべし

絵本仮名手本忠臣蔵大尾

右は作者の筆をはせ見よう御覧にしは
あらはせし忠臣蔵をさし二番目にも
すくなからずいよいよ切狂言の思
召立の御好みにより近日
摺込て出し奉り候

月日

御江戸

湖原堂

小川町の二番目と云せしハ塩谷判官の四合目なる
大星由良之助ハこの若君の塩谷家の御後見なる
ぞと仰合せしかどそのるまへかるハ是非なく
師直を討まさんと変定ありしかの鉄のごとく
艶めし密書を切程云と云せしが後世討ハ切程を
とありし由太鼓文吾の酒屋が末代までも残りその
風流を貴親せし由まことに忠義の功にていと
ありがたきぶゐんきことど身を窶し姿を賤ありしく

数の指子を例ひ実に貧困のさまなりしハ浪館に漏
出紙張くあきける一條まても忠ぎのこと其の
著る日十二日の朝のあかりし文吾の所用ありて本所へ
出かけるが途中にて猿掛への竹紙由げ男子一升六文ぐぶ
文「ハイく竹やく 竹紙売男子に継出かけて
文「よしく 是非いくらでもいゝが御紙
売て下せへそしてあまり売るまで閑俳み寄酌せ
よひ竹人の「エ 竹エそれありあへさんへまさに此竹を

売ってまうけれど　とりよのこ子　お雛ならば　元安へ稼く
奥出しなさるのは　私が忘とし申し口銭を取る日に
ありやア　おめへさん　まうける根本は　ありやせん　そしらく
私がおまへさんに負けてやるく　くまへなるがおめへぶらうら
銭なぞ　上ましが　門並売って　わるく　取うかまうかみせん
だろくしは　文へ「あるかとぞ　それは　そうぶ竹の代へ弐
いるぞ　竹「へ弐銭でく　文へ「そうよ「ときで三百銭ぞア
私も四日ぶり三百文に負てやるのぶろ　法まう銭く

十本あり　売ってさのが今銘のうちのまうけぶア　文へ「お紙
あるが　こまぞ紙屋のもうらう　その竹紙　おまへに売るが　せてく
まや上ト　繰手よりして金百匹　皇紙まつまさ　いさせは
竹売るは　勘定きえてく　竹「ありやす　銭と壱歩ま其のく　文へ
いやく　それでは　弐分で　わらうが　その紙　弐銭をせるかつ
ぶんぞ四五割売る　わるが同道して下せえト　いわんまぞ竹屋へ
わざわざ　竹「それでは　おまへは　竹紙売ってまうける　銀では
まく何が根本のわとりというざるのでどぜ人まうけ　マア　その

形ぞハいとけやけ見ん姿を中川屋串銭ならバ竹葉らしく容
を清くするぞドレく見しかト大鷲文吾が竹葉亭柳子あし
らへて 竹「サア 竹を肩への甘く それの甘えまし アイく ど
うも新銀萬人の母ぐさしくバ文吾もうち案じ竹やく
も江の内竹やも全の義理もまバ志ぞくく附そひさし
えりく母らく工夫もなよけるかくて文吾ハ師匠の屋
志紀の前紙賣ハあるく折も家中の宮の方より呼
ひ道くれて文吾ハよろこび他の竹賣あるく小

春の緒もあふぐる大安賣無残やちらくとよ商あくバ
工夫りの店とも欲の世や轉か世をき竹の述る勝く
門より家中より逢門番買人バ大鷲文吾矢の助と
知るよふとび長屋の案内工夫もなく歩み行どかる際
物賣ハめ中しものもわらさまバ思ひのまゝ小見張て居
里中て屋敷を出ずてけるが婦女川の方へ歩く所ぶ
向ふよりして大鷲が姿をみつけく来るまる人を則宝
井甚角 甚「イヤア 何ごとかあらう 瀬尾の師匠の文

ト 実にたぐひなき姿アハレそれとても俳諧の神仙とハ 丈へ
イヤハヤ面目ないあの仕業風雅も知らぬ今日の辛苦 甚へ
何ごとも実のない浮世の盛衰さへさめぬその一盃なるらう
といひながらとゞかぬ事とうち連て甚角が旅と大騒ぎ
なし雅俗室井にまさる子義の文武両道ありとうち忠
義の心より出川をとふらね室晋斎その貧困をあはれ
みまいらせるがらも世捨人に等しき甚角へ銭かさ
なく居酒店にぞ入りにける

驚きしハ甚角ハ元医師の業として名を竹下頌哲
とよびしく蕉門十哲の中一生涯の秀逸おびたゞしく
かぞへがたし其五元集焦尾琴なんどあまたの集
あり或酒屋の御秘蔵に反古の一軸といふものあり
ける晋子甚角が名誉とてそれをいふなと君
ねるに月と萩とを画きし表具なりその画名筆にて
蕉翁を賛の傍に句拙のとある筆の画にて
白雲の紙とあるなき萩の句なりかし

鄰ぜうは君なくとまで賞翫せられし夜其角が
亭上ありしとなりとまで着せかゝる其角は忽ち筆
とりて白扇ある手のひらその五文字に墨紙ひとさ
まかさいつくみ

月かげや ト 書きし出家は御節にありける人に
いかに及ぶべき大字もおどろかしけるせあれど都に驚
し見世捨人のをりは見ぬ絵なる狂人のありと申さし
なひしが かくして其角の事をもしと云へ書が門人

晋子は実に独学の徳あり 師匠の句に筆をそれ
る大躰に縁ある所為あらざりやとあり
けるは其角のことば紙とりて晋子を世に賞しゝや
ゆう晋子まではいへども 此公様のおもむきねるゝものゝこゝには
とひひくまさ筆紙とりて
月かげや○の初五文字は晋子其角が名吟なり
上一きをさすなり公様は御ながみとよく其角は雲に月の
光りのうつるといふをもて月影を下へ迷せしなり

げにも江戸八百八町の繁昌 凡そ六十余州の気性をあつめ
豪傑ともいふべき者の一群 甚だ多しと其角が沢古
の掘出物とぞなるべし殊に市中の人ともいふ
べき歟

第六回

時に晋子ハ湖月堂と酒くみかはして興じけるにふ
と世の盛衰を観念し文覚が浪々のむかしを哀れに
おもひければ後の墨汁の筆をとりて

年の瀬や水の流れも人の身も　其角

と吟じて子葉にしめしければ子葉も手さし筆をかりて
一句附たり

あしたまたるゝ 宝船　湖月堂

其角ハこれより後まで湖月堂を不審しくおもひける人の事
しれ姿を知て今ハ彼のおもかげにも忽ち思ひ出せるに
その開運の時節なりて仙といふ人ぞかへし不風
流れゆくさまげしきを見て其処より別れしがその翌夜の

復讐十五日の細川陣所へ引取る義士の後より追かけ大鷲文吾に走りつき一昨日の附句の心をよくよく悟り　甚「て其角は甚角は鄙俳は下手ぐくと涙をながしけく。態とまでそれの宝船とか今日の事までありけるを不風流と思ひそし別れしことの恥かしけれど後悔しける。因縁寺まで送りしとぞまた討入の夜の雪に蕉書屋にて討入の頭巾をりし男の絵のそのくと口ずさみしを文吾は聞とがめて子細をたづねしに

えく

絵のその発句も画きて素の句と附させしが其の時の巻軸にて懸念中の評判ゆくありける其の其の句に絵のその容易流を打ちかちんとおもひいと面くよろしきとゆかりいとくかで義士の士なり其の風流に劣らぬ雅にて其業の人あれども二の図をなかりて隠悪を洗くし死して名を残せる者あり　宝永四年富士宝永山の出来る十月発旬の

宝晋斎
路よ子蝶が
異るをいそぐちよ
おどろく

図 法蔵院の裏門に菰を着て死したる乞食あり
其枕元に矢立懐紙などありて辞世に
臥所の雪解て硯の墨衣
かしくと筆は終りたりけり
法蔵院の和尚これを憐んでねんごろに葬むり弔らひ給ひ
石碑の残りて
蔵光院存儀居士
と戒名残りたりとぞ 東海道金谷の宿沢の佐七といふ人

其の施主なりとぞ 佐七ハ塩冶家恩顧の町人なりしが
かしく坊といひし文禄十四年の頃江戸に出る俳諧の
師なく其角が友なりしが十五年十二月十六日其角の許
へ一紙をおくりて行衛かくし東海道在々に乞食して終
其紙法蔵院の裏門に示せしなり其角の許へおくりし
書ハ

生前の志ざしを顕さずして死後汚名を

百年に傳ふ名是同列数十人差わ
いろは仮名忠臣の手 唯黄泉の名のこ
知らん
世の人の目に見ずやそしや雪乃色

戯号 かく坊
鴨野十三

ここに四十余人のその一人 鴨野十次衛が舎弟 小山進

藤悪心者と連判を携へて新坂かくし置きし一巻の大
星が跡をおりそそるわれが二夜の對手を仰げし二
下僕人の列にありけるさまぞ老が藏し義を存ぜ二
君の子佐兵ぬ名を居をひそかに知ゐて法者院の方丈が
藏見院存義居士といつけるもしとぞ其余蔵川細
平宗助といふ者は塩谷家浪落の後竜里兵作さる乃
蒲中余蔵川佐工門方に同居してありけるが伯母なる者
細平はいと初こ不便を今人わりつるに細平が住宮の年

役わりとして毎日〳〵出あるきける日大雪の際にもいとはず
いそぎんとせしが伯母ハ引止め伯父縁平いろ〳〵孝心をいひ
ぐといふことを今日ハ出るなとよろこびけるに大雪に一日
ぐらし日を延しとて大事もなかるまい扨イヤそうでござ
りませぬ先年も親父にも日暮を恐しく覚ますんあらず
十二歳ぐらひをいとひませぬ是非とも参りて身のかせぎ
を　伯〻案じる伯母の心もかまはず何が不足で家出をいそ
ぐらいにぞんくに際つゞき寒さにあたりて煩ひ出す

者の難でありし伯父さまが養子に付添と是
迄くも縁平方の下級風情と不足に思ひて返事も
甘ずる義理も千金よりてまことに縁もなくも不孝な
る下級なる伯母の一言に堪忍ならずその怒へ出入の町
人請座者訪ひよりもの入来り振子を頼みて中よりいり
縁平が浪人の心づかひ銭惜し金四匹を縁平らに合力
して酒までも呑ませ今夜ハ徒人ゆくことを備へとしき
めく別れしが是十二月十二日のことにて縁平ハ挨拶伯母を

すてにおつらく吉良上野が首をとりて泉岳寺へおもむく
むけて出立しけるそれより十五日まで吉信ありて十五日
の朝塩谷浪人忠対の首を尊らしく毛里家の門前
を引あげくゆく義士の行列
鎗を持る者二人先に立その次に太鼓を携へ
それより打物持下人その次鎗二本を合せて
首を結び付その次に大星由良之助その後へ
片ひくの打物まで二十余人その中に手負は駕籠

頭巾に綏まつけ白綾をんだ鉢巻し手おひ
さるものいさぎよく鎗杖まであるきけり
毛里家の人々は見物しけるが手負は
命を軽じて引ゆく姿つん返る備父は深のよろこびおらる
摂屋萩之清も来り金谷川の門口より義御紋所ござんで
手負さぞも高輪のおし屋しきへ忠対の御運中今日
門前引てござるいさぎよき錬よふんめでござるがまんはへ
き萩之清どのが当て下さると義車あざら此方の鰐が

忠義の鑑けなげなる孫孝しさいはひのとし中渓の伯母
がよろこび 表「イヤモウ 孫らしい孝行づくしあるなど頼母
しいおんちからの見物がぞろぞろと付て往ますが 差て採木
人なる武士まさ別段でござりまする 伯母「イヤなんと勧申
が残しさ 残と手紙がわると云いてそ添て渡
すべりぶらしながらひらきみれば
御家老様の為用酒と菓子の代料をも申請ば
残り御礼を申して帰ん

お別れをしまをいたしけれは 菓子酒
重ね重ね恵みの恩にあらん
と遺言紙ことそへあらせしとぞ

江都作者　狂訓亭爲永

全畫工　溪齋英泉

美艶仙女香
黒油美玄香　一包四十八銅ツヽ

近年まれなる評判よろしく諸国よりの
御注文夥しく御座候御求め御ためし可被下候
江戸京橋南伝馬町三丁目　坂本氏製

天保七年丙申正月黄道吉日

東都
地本問屋　上田屋久次郎
山本平吉
書物問屋　中村屋幸藏版